慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	関口さんのこと
Sub Title	
Author	三室, 次雄(Mimuro, Tsuguo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 No.35 (2003. 2) ,p.244(1)- 241(4)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20030210-0244

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

関口さんのこと

三室 次雄

関口さんと出会ったのは、私が月刊誌『基礎ドイツ語』(三修社刊) の執筆に加わったのがきっかけである。お互いにまだ三十代半ばであった。それまで同誌の読者であった私は、関口さんが以前から若手の執筆者の一人として健筆を振るい、またこの雑誌の創刊者であり、日本が生んだ偉大なドイツ語学者、関口存男先生のお孫さんであることは知っていた。編集会議では、関口さんは常に積極的に発言し、斬新なことを提案しては、それを一つ一つ見事に実現していった。関口さんの書く記事は常に新鮮であり、手際よく要点をおさえ、軽快で、ユーモアに富んでいた。編集会議が終わると、私たちは決まって神楽坂界隈で飲んだ。そこでもまだ、雑誌の話は続く。飲むほどに、関口さんの議論は熱を帯びてくる。さらに場所を変えて、飲み直す。そしてまた、話は続く。いつの間にか、私は関口さんと最後まで席を共にするようになっていた。

やがて関口さんは、NHKテレビの『ドイツ語講座』を担当することになった。その機知に富んだ番組に接して、ドイツ語を学ぶ楽しさを見出した人たちは、数え切れないことだろう。私も放送を見ながら、楽しい雰囲気の中で巧みに教え込んでいくその見事な指導法から、多くを学ばせてもらった。関口さんにとっては、多忙の日々であったに違いない。まさに寝食をけずってのことであったと思う。しかしどんなに忙しくても、関口さんは大学の授業や諸々の業務、執筆、講演と、自分に与えられた仕事はすべて誠実にこなしていった。すべてをきちんと、見事にやってのける卓越した能力があった。その力量を買われてのことであろう、慶応義塾大学の湘南

藤沢キャンパス（ＳＦＣ）に新学部が開設されることになると、関口さんはその開設準備委員に選ばれた。新しい学部に託す夢、さまざまな構想を、私は幾度も関口さんから聞いた。雑誌や他大学での非常勤講師などの仕事から手を引き、ＳＦＣに専念することになった関口さんの意気込みは、大変なものであった。当然、私たちも会うことが少なくなった。

しばらくして、私の勤務する大学で関口さんが講演をしてくれる機会があった。ＳＦＣで実践しているドイツ語の授業について、ビデオでその様子を紹介しながらの講演であった。学生たちと文字通り一体になった授業は、スタジオでカメラに向かっていたときよりもさらに活気を帯びていた。真剣に、しかもなごやかで、笑いに溢れた授業の進め方に、大学の授業でこのようなことまでできるのかと、私は大きな感銘を受けた。また、私も一度ＳＦＣを訪ねたことがある。関口さんはあちこち案内しながら、丁寧に説明してくれた。コンピューターで二十四時間いつでも学生の質問や添削に対応できるようになっていること、毎回の授業の教材を開発・作成する作業は深夜にまで及び、家に帰れず、研究室に泊まることもしばしばであることなどを聞き、その熱意にまったく頭が下がる思いであった。そこには、かねてより関口さんが力を込めて提唱していた「発信型の外国語教育」にまさにふさわしい学習環境が、しつらえられていた。ベテランの小林栄三郎先生、新鋭の平高史也さんという素晴らしいスタッフと共に、関口さんが理想としていた外国語教育の実践の場が、実現されていた。そして、それが日本の大学における新しい外国語教育のあり方として、高く評価されていることは、広く知られている通りである。

関口さんはその後、ミュンヘンで一年間研究生活を送ったが、帰国してすぐ関西で学会があった際に、私たちは車を借りて紀伊半島を巡ることにした。温泉につかって、くつろいだ私たちは、杯を交わしながら、心おきなく語り合った。関口さんは相変わらず、熱くドイツ語のことを語り、ドイツ語教育を語り、文学を、若き日のことを、そして人生を語った。かつて小説を書いたことがあるということも、私はそのときに聞いた。

学生であれ、私たち友人であれ、関口さんは誰に対しても常に、同じ立場に立ってものを考えてくれる人であ

った。それは能力があるからこそ持ちうるゆとり、と言っていいのかも知れない。その優しさ、誠実さは、多くの著作の中にもはっきりと表れている。鋭い切り口と軽妙な語り口を駆使しながら、あくまでも読者の立場に立って、共に考え、言葉を身につけていく喜びへと導き、その喜びを分かち合ってくれる。中でも総計で九〇〇ページを超える、大修館から出版した『マイスター　ドイツ語コース』（第一巻「文法」、第二巻「表現」、第三巻「語法」）は、関口さんのドイツ語観・教育観に基づいた、関口さんでなければ書けない名著である。そこにはまさに「関口一郎ドイツ語の世界」が余すところなく展開されている。

多忙な日々を強いられながらも、関口さんは家族との生活をいつも大切にしていた。新しい本を出版すると必ず私に贈ってくれたが、添えられた手紙や、年賀状には、決まって正子夫人と愛娘さほさんとの温かい生活の様子が記されていた。近年は小唄を好み、家でも「江戸部屋」と称する部屋を作っていたそうである。大学で外国語を専攻し、留学してヨーロッパの生活を体験し、教師になってドイツ語教育に情熱を傾け、常に新しいアイディアに満ち溢れていた関口さんだったが、心の底には、日本の古き良き伝統に強く惹かれるものがあったのである。家族をいつくしみ、学生を大切にし、私たちを真に理解してくれたあの優しさ、そして、いかに忙しくても一つ一つの仕事をきちんとこなすあの誠実さ。それは、関口さんが「義理」や「人情」と呼ばれるものを人一倍持ち合わせていたからだ、と言ってもいいだろう。そんな関口さんが、さらに江戸学の世界に分け入っていったら、どんなに面白いことを示してくれたであろうか。あるいはまた、本格的に小説をものしていたかも知れない。関口さんにはまだまだやりたいことがあったに違いない。関口さんでなければできないことが、そして、関口さんにこそやって欲しいことが、まだまだたくさんあった。それらすべてを奪い去ってしまった死は、あまりにもむごい。

関口さんは亡くなる前に、集英社新書として『「学ぶ」から「使う」外国語へ』という本を出した。いつものようにこの本も贈ってくれた。私は一気に読んだ。自分のドイツ留学の体験やSFCのこと、外国語を学ぶことの意味、その楽しさ、大変さ、そして具体的なノウハウに

いたるまで、そこには外国語教育の理論家・実践者としての関口さんのすべてが込められている。勢いのある筆致、軽快な話の展開、洒脱な語り口。関口さんの声が、直接聞こえてくるようであった。随所に盛り込まれた留学中などのいろいろなエピソードは、まるで関口さん自身を主人公にした小説の一部であるようにすら、私には感じられた。しばらく会ってはいなかったが、いっそう冴えを見せるその健筆振りに、当然、元気であることを、私はまったく疑わなかった。しかし、関口さんが体調を崩して一度入院された後に、ドイツ語の教科書と共にこの本を一気に書き上げたことを、正子夫人から聞いた。二度目の入院をされたとき、夫人が連絡をくださり、すぐにお見舞いに行ったときのことである。最初の入院すら知らなかった私にとって、あまりにも大きなショックであった。今、改めてこの本を読み返し、これを関口さんはもしや、遺書のつもりで書いたのだろうか、という思いが一瞬、私の脳裏をかすめた。いや、決してそんなことはない、関口さんは何事にも常にベストを尽くす人だったから。

関口さんの数多くの論文、参考書、教科書、会話テキスト、外国語教育論等々の著作、テレビでの活躍、ゲーテ・インスティトゥートなどあちこちで行った講演、そして日本独文学会理事・ドイツ語教育部会幹事を始めとする学会活動等、その偉大な功績は誰しも知るところである。関口存男先生のお孫さんとして非凡な才能に恵まれていただけではない。さらに人一倍努力を重ねられた。関口存男先生が切り開いた深遠なドイツ語学の世界に、関口一郎さんはさらに社会言語学・認知科学的観点から、現代的な大きな広がりを与えた、と言えるだろう。日本のドイツ語教育界に、大学やテレビ講座で直接指導してもらうことができた人たちの心に、その幾多の素晴らしい著作を通して学ぶことができた、そしてこれからも学ぶことができる読者に、公私を問わず出会うことができた私たちすべての胸の中に、関口さんはずっと生き続けてくれる、それは間違いない。

だが、関口さんに去られて、私の心に空いた大きな穴は、埋まっていない。いや、埋まることは、決してあるまい。